

まるっこ Marukko

Maruko Central Hospital Public Relations Magazine

Free
12
2020. 夏号



【丸子中央病院の理念】 本院は、質の高い医療の提供を通じて地域のしあわせ創りに貢献します。

丸子中央病院 糖尿病センター長

大房 裕和

「尊敬する人によせて」

昭和26(1951)年。今から凡そ70年前。上田城跡公園の近くに今もある、赤い屋根の薄い水色の板張りの美しい建物に、その2年前に施行された身体障害者福祉法に基づいて、県立点字図書館が開かれました。上田では、それより50年も遡る明治32年には視覚障害者教育の場が設けられていました。

幼い頃に読んだ伝記のなかに、ヘレン・ケラー(1882~1968)がありました。生後2歳前にして、突然襲った高熱(今日では、ウイルス感染による自己免疫疾患が疑われている)で視・聴覚を失ってしまった三重苦の人のこと。年齢とともに衰えるのは自然の摂理ですが、それが僅か3歳前に失われてしまうとは！「3歳までは神のもの」という譬えや、健やかな成長を表す「3歳3輪車(こども)の事故が増え始める年齢」の戒めは、今日でも忘れてはならないと思います。7歳の時の「アニー・サリバンとの出会いは感動的です。自らも視覚障害者であった22歳のサリバンは、電話の発明で有名なグラハム・ベル(1847~1922)博士(この人の母、妻とも聴覚障害者でした。)に、ヘレンの父が相談し

た結果、招かれた家庭教師でした。「WATER(水)」が、言葉を取り戻したヘレンが初めて喋った言葉でした。サリバン先生が懸命に指で手のひらに書いた文字を読み取ったのです。それから、15年後、ヘレンは、五か国語を操る知性美にあふれる女性に成長していったのです。サリバン先生あつてのヘレン・ケラーである私の幼い心に強く残りました。日本最初の盲人福祉施設日本ライトハウスの創設者、岩橋武夫の懇請で1937年、48年、55年の三回来日していますが、二回目の来日が後押しして、先の身体障害者福祉法が成立しました。



生まれたこと。病気にあつたこと。よき両親と先生。長寿だったこと。これらは、巧まれて起きたことでは決してなく、ヘレン・ケラーのような三重苦の人が、私たちによりよき社会を築ききっかけを与えてくれたことの偶然に、いま新たな感動を覚え、感謝したいと思います。



イラスト/森田 宏子



1948年、来日時に講演中のヘレン・ケラー(左)秘書のトムソン女史(中)の唇を読んでいる。通訳役の岩橋武夫(右) (筆者蔵)

Contents

特集 興
フィルムにも残るあの赤い鉄橋を

森谷雄 監督インタビュー

特集 興

地元を盛り上げて、守りたい
上田市と映像制作者をつなぐ信州上田フィルムコミッション
山岸 咲恵さん インタビュー

連載 番外編

丸子電鉄から読み解く―丸子の歴史 番外編
別所線の赤い鉄橋の歴史

トピックス

Marukko TOPICS



フィルムにも残るあの赤い鉄橋を

上

田市は「映画の街」として古くから有名でした。

近年では「サマーウォーズ(2009年)」、「青天の霹靂(2014年)」、「最初の晩餐(2019年)」、ドラマでは『真田丸(2016年)』等の作品が上田市をロケ地や舞台としており、更にさかのぼれば黒澤明、小津安二郎をはじめ、鈴木清順、山田洋次など、日本の名だたる監督が作品を撮っています。大正時代の作品にもロケ地として登場している。

上田市は、2001年には全国で10番目の組織として「信州上田フィルムコミッション」を設立し、街ぐるみで映画づくりをサポートし始めました。日本全国、そして世界中の人がスクリーンを通して上田の街並み、自然、そしてあの赤い鉄橋を目にし、落ちた姿にショックを受けたことでしょうか。東日本台風からの復興、そして新型コロナウイルスが収束し、また街中でカチンコの音が聞こえる日常に戻れることを願うばかりです。



別所線の鉄橋が使われている作品(一部)
映画「サムライフ」(2015年、森谷 雄監督)
映画「シグナル〜月曜日のルカ〜」(2012年、谷口正晃監督)
PV「君は僕と合わない方がよかったのかな」(2015年、乃木坂46)



① ©2012「シグナル」製作委員会
② Oh,My Dad!! フジテレビジョン
③ ©「兄消える」製作委員会

「上田市が舞台」の映画「サムライフ」 森谷雄 監督インタビュー

作品を作るうえで、フィルムコミッションの役割重要性や期待などはどう感じていますか？

今では撮影にはフィルムコミッションが必要不可欠な存在だと思います。特に、都内での撮影が困難なものが、地方のフィルムコミッションの力で実現していることが多々あります。東京では難しいものが、地方に持っていくことで実現するとなれば、撮影自体を全て地方のフィルムコミッションの協力を得て組んでいくほうが制作面での助けとなり、かつ、撮影隊や俳優部の映画作りへの集中力も高まり、より良い作品ができるのではないかと思います。実際、僕のプロデュース作品『最初の晩餐』は九州の設定ですが、最初から監督やスタッフに上田を提案したほどです。誰の心にもある「故郷の原風景」が上田にはあるし、撮影への協力体制がしっかりしているということを力説しました。メインのロケセットを数ヶ月借り切れたのも、信州上田フィルムコミッションと市民の皆さんのご理解の力だと思います。僕らの仕事は本来ならその必要性を理解されづらい仕事の一つです。なぜその作品を作るのか?を常に問われます。しかしながら、作る環境を整える一助となるフィルムコミッションのおかげで前に進めるようになることが本当に感謝すべき点であり、映画文化を支えることに繋がっていると思っています。

2019年、東日本台風の被害で森谷監督が撮影にも使用した別所線の赤鉄橋が落ちてしまいました。その報道や実際に鉄橋をご覧になりどのような思いがありましたか。

知らせを聞いた時、すぐにでも飛んで行きたいほどでした。ちょうど、撮影中でどうしても行けなかったのですが、昨年末、やっとあの『サムライフ』の赤い橋を見に行くことができました。駅から歩いて千曲川まで向かい、ちょうど橋にさしかかったところで、橋が陥落しているのを見て、なんとも言えない気持ちになりました。しかも、僕らが撮影をした側の鉄橋が落ちてしまっていました。涙が出てきました。映画の象徴のような場所が姿を変えてしまっていることにショックをおぼえました。僕に何ができるのか?を考えるようになりました。映画の上映と講演を組み合わせ、その収益を復興に寄付するようなことができないか?とも思いました。まだ実現していませんが、いつか実現したいです。

森谷 雄(もりや たけし)

愛知県生まれ。株式会社アットムービー代表取締役。「天体観測」(フジテレビ)、「ザ・クイズショウ」(日本テレビ)、「深夜食堂」(毎日放送)などのドラマをプロデュース。映画作品は『しあわせのパン』(三島有紀子監督)、『曇天に笑う』(本広克行監督)、『最初の晩餐』(常盤司郎監督)ほか多数。監督作品に『サムライフ』、『アノバーサラー』がある。著書に「母への100の質問状」などがある。「ええじゃないか」とよはし映画祭」のプロデューサーも務める。



上田市、信州上田フィルムコミッションとのこれまでの関わりを教えてください。

上田市を初めて訪れたのは、「サムライフ」の著者である長岡秀貴先生にお会いした時でした。その後、取材も含めて何度も上田市を訪れるうちに、そのロケーションの素晴らしさに気づかされていきました。7年後に映画の製作が始まり、本格的にフィルムコミッションとのコミュニケーションが始まりました。映画『サムライフ』に登場するロケ場所は全て実際の場所で撮影したいとお願いしました。それを一生懸命叶えてくださったのが、「サムライフ」の本の中に掲載されている写真を撮影していた、当時のフィルムコミッションの原悟さんでした。撮影前、撮影中、撮影後、公開時と、何度も上田市を歩き、僕は上田市の皆さんと信州上田フィルムコミッションさんによって「映画監督にしてもらった」と公言するほどになりました。それくらい、上田市は映画に対して理解のある場所だと思っています。その後、上田映画の理事を務めるまでになるとは思ってもいませんでしたが、すでに僕と上田市は切っても切れない「第二の故郷」と化しているほどです。



©2015「サムライフ」製作委員会

Message 森谷監督からメッセージ!

僕を映画監督にしてくれた街である上田ではこれからも作品作りをしていきたいと考えています。監督としてはもちろんのこと、プロデュース作品でもまたお世話になりたいと思っています。本来なら「上田のお話」を上田で撮りたいです。でも、それ以外でも皆さんと作品を作りたいですね。上田での映画祭にも参加したいです。とにかく、皆さんの「映画愛」と触れ合いたいです。美味だれ焼き鳥、檸檬の焼きそば、志「まんやき、ルヴァンのパン、岡崎酒造のお酒、書き出したらきりがないけれど、美味しいものだらけの上田で、皆さんと舌鼓を鳴らしながら映画のことを語り合いたいです!

地元を盛り上げて、 守りたい

上田市と映像制作者をつなぐ
信州上田フィルムコミッション



信州上田フィルムコミッション
山岸 咲恵さん
上田市出身。
都内のドラマ制作会社で働いた後、リターン転職で2016年より現職。上田市で撮影される映画のロケ支援に携わり、またエキストラやロケ地の方との交流を深め、次回のロケに繋げている。



私

自身、中学生・高校生
のときは「上田には何もないから早く東京に出たい!」と思っていました。実際、高校を卒業して都内の学校へ行き、その後8年間ドラマの制作会社で働いていたのですが、2011年に東日本大震災が発生し、改めて自分の働き方を考えたときに「地元を守りたい」という思いが強くなったんです。それで上田に戻り、信州上田FCで働き始めました。すると「何もない」どころか、多くの監督が撮影に来るほど魅力が詰まった街なんだということに気づいたんです。ある監督が「上田には誰の心の中にもあるふるさとみたいなものを感じる」と言っていました。千曲川の青、鉄橋の赤、そこに電車が走る。本当にのどかで良い風景。古い建物や町並みも多く残っていますし、何より人が優しいんです。

撮影中に「頑張ってくださいね」と声をかけてくれたり、お借りしたおうちの方がお味噌汁や野沢菜などを差し入れてくれたり。東京ではそんなことありえなかったですから。
今はそんな魅力をたくさんの人に知ってほしいので、ロケ地マップを作ったり、作品をPRしたり、観光に結びつような施策も行っています。そのなかでも私が一番大事にしているのは、地元の人たちに「上田ってこんなに良い所だったんだ」と感じてほしいということ。昔の私のように「上田には何もない」と思っている人たちに、映画やドラマに使われるくらい良い街なんだと知ってほしいですね。
担当した最初の大きな撮影は「青天の霹靂」(2014年公開)でした。上田映劇で撮影したシーンではエキストラで客席を満員にする必要があり、



そういうバタバタもあるけど、やっぱりエキストラさんには、なるべく楽しんで帰ってほしい。待ち時間が長いときは、制作スタッフとの間に入って休憩を細かく調整したり、寒い日はカイロを配ったりもします。ほかのフィルムコミッションからは「県内で一番エキストラに手厚いのは山岸さんだ」と言われたこともあります。ですが、そこは私としては大事にした部分なんです。先日もエキストラさんへの感謝イベントを企画して、50名近い

人にお越しいただきました。来年2021年は信州上田FC創立20周年なので、記念イベントも開催したいですし、ロケ地マップを新しくしたり、いろいろと展望があります。これからも信州上田FCを通して地元・上田を盛り上げて、守っていききたいですね。



エキストラ参加者インタビュー

「新・信濃のコロンボ追分殺人事件」の撮影に参加したエキストラさんにお話を聞きました。

Q. 今日はどういう役でしたか?

「刑事役と警察官役です。役柄に応じて山岸さんが「この人合いそう」と思ってオファーをしてくださるんですよ。」



Q. エキストラの楽しみは?

「作品を見た家族が喜ぶことです。あ、お父さん出た!って。ほんの一瞬なのに(笑)。」

「有名人に会えたり、作品の記念グッズをもらえたりすることもあるので、楽しいですよ。」



ロケ地は旧宣教師館(上田市下之郷)

Q. エキストラ登録のきっかけは?

「小泉今日子さん主演ドラマ『贖罪』のエキストラ募集があり、たまたま自宅の近くでのロケだったので面白そうと思い登録しました。」

「私は『真田丸』に死体役でもいいので出たいと思い登録しました。そしたら本当に死体役で出演させていただきました(笑)。大阪夏の陣のシーンだったかな。感謝しています。」

Q. 上田市がロケ地になることはどうですか?

「上田を知って頂く機会になりますし、うれしいです。ぜひロケ地巡りもしていただきたいですね。」

「台風の被害もあったので、別所線の鉄橋が直ったときには、またロケで使ってもらえるといいよね。」

頑張って150人ほど集めたのですが、天候の関係で前日に撮影が延期になってしまったんです。全員にキャンセルの連絡をして、再度150人集める必要がありました。しかも、今度は平日に!なんとか集めて無事に撮影できましたけど、本当に大変だった記憶しかないです。

チャンネル登録してね!

丸子中央病院 公式YouTubeチャンネル スタート!

新型コロナウイルス感染症により、これまで病院で行っていた出前講座や運動教室が開催できなくなってしまいました。そこで丸子中央病院ではYouTubeチャンネルを開設し、ご自宅や日頃の生活の中で活用できる動画の配信を始めました!



【おうちで体操】

外出を控えるなかで、特に高齢の方は一日の活動量が減ってしまうと体力・筋力ともに落ちてしまいます。これを予防するために自宅でできる運動を動画でご紹介します!

「いきいき脳トレ体操」「肩こり体操」「体のバランスをチェックしよう」etc.



【ママの輪】

産後ママの体ケアをサポートするために理学療法士が3つのテーマに沿った動画で体づくりを応援します!

「1.腰痛編」「2.尿トラブル編」「3.くびれエクササイズ編」



●発行
特定医療法人 丸山会 丸子中央病院
経営企画課 広報係 Marukko(まるっこ)制作委員会
〒386-0405 長野県上田市中丸子1771-1

●編集・進行
北澤 淳一(丸子中央病院)
安藤 あすか(丸子中央病院)
春日 真翔(丸子中央病院)

●アートディレクター
五木田 忠之(MOKUBA.CO.,LTD.)

●デザイン
MOKUBA.CO.,LTD.

●お問い合わせは…
丸子中央病院 経営企画課 広報係
Marukko(まるっこ)制作委員会まで
TEL.0268-42-1111
月曜日から金曜日、10時~17時(祝日・休日・年末年始を除く)



ロケスポットの千曲公園。ロケ地を周ると上田の歴史、魅力を再発見できますよ!

編集後記
この取材をした直後から国内でも新型コロナウィルスが感染拡大し、病院もそうですが映画や映像の業界も多大な影響を受けました。画面に映る役者の裏には、監督、脚本、演出、カメラ、照明、音響、衣装、メイク、編集、フィルムコミッションなど、本当に多くの人が携わっていて、知恵を絞り出し、楽しみを届けています。そういった興行が日々の暮らしを豊かにしてくれていたことを改めて感じ、感謝、応援していきたいと思いました。(春日)

番外編

上田丸子電鉄の歴史について連載している本欄ですが、今回は番外篇。上田市民にとってシンボリックな存在の赤い鉄橋ができた当時のこと、そして2020年4月現在の状況を綴ります。

別所線の赤い鉄橋の歴史

2019年10月の東日本台風により崩落してしまった別所線の赤い鉄橋は、上田市民はもとより、ニュースになったことで日本全国にショックを与えました。2020年6月に堤防の復旧作業が完了し、今後は強固な堤防が赤い鉄橋を守ってくれそうです。

現上田電鉄別所線は、大正10(1921)年6月17日に開業しました。当時の会社名は「上田温泉電軌株式会社」と言い、別所線(当時・川西線)

とともに青木線も開通しましたが、鉄橋(千曲川橋梁)が完成しておらず、三好町停車場(現在の三好町二丁目バス停付近)が上田側の発着点でした。

電車の鉄橋ができたのは大正13(1924)年8月15日です。その当時の写真を見ると、現在の鉄橋の姿のものにも見えます。

近年では平成23(2011)年に再塗装され、その年の3月には「千曲川橋梁塗装工事竣工記念入場券」も発売されました。

鉄橋がかかるのは奇しくも別所線開業から100周年となる2021年の春の予定です。



大正11年6月の長野県上田市全図(*1)。「発着所」とあるのが三好町停留所。上田橋はあるが鉄橋がないのが分かる。上田駅南側が桑園なのも印象的。]

大正13年、竣工当時の千曲川橋梁(*2)。現存の橋梁の形に近く、約100年たった今でも上田市のシンボルなのはうなずける。



2020年3月(左)と4月(中)の工事の様子。堤防の復旧作業が完了(右)して3段構造となり、強固になる。災害から2日後の様子

*1「上田古地図」(尾崎 行也、佐々木 清司/責任編集、2015年2月70ページより抜粋)
*2「東急と上田交通」(堀内 雅之助/著、1979年4月、巻頭写真より抜粋)